

---

Swastika • Wing

簪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S w a s t i k a ・ W i n g

### 【Nコード】

N 2 1 4 0 J

### 【作者名】

簪

### 【あらすじ】

チアフル・ダークマティ・クリーチア。そして天使・悪魔・人間。住む世界が違ってても、彼等のすることは只一つ。争い。天使のもつ羽を巡り、世界を巻き込む戦いが始まる。其処に生を受けた幾多の命がそれぞれに選んだ道とは…？

## 一羽 全ての始まり

それは冬の夜だった。

しんしんと雪が降る中、高い建物の屋上に一人の少女が立っている。ほう、と白い息を吐く少女は、この寒さだというのに薄着姿だ。

ピンク色の髪を風に揺らす少女の隣に、ふわりと少年が降り立った。そう、その少年は、夜の空を舞い降りてきたのだ。

その証拠に、少年の背中には純白に輝く、大きな翼が生えている。

少女はそれに驚きもせず、隣の夜目にも鮮やかな赤い髪の少年に赤の瞳を向けた。

そのまま穏やかな口調で話しかける。

「駄目だよ、りく。クリーチアなのに、空を飛んじゃ……。」

クリーチア 人間たちが住む、所謂“現世”といわれるところである。

少年は少女の忠告を軽くいなした。

「大丈夫だって。こんな寒い冬の夜に、わざわざ人間が出てくるかよー！」

笑って言った少年も、真冬とは思えないような薄い服を着ていた。

「だって、もし見つかったら、私たち殺されちゃうんだよ？」

少女は心配気に恐ろしいことを呟く。

「だから、大丈夫だって。それより、さ。」

少年は真つ暗な空を見上げる。  
釣られたように、少女も天空を仰いだ。

「「始まる」「

二人の声が重なった途端、人間には聞こえない声が二人に届いた。  
それは、試験の始まりの合図。

一人前の天使になるための、最後の試験……。  
卒業試験が、始まるという合図だった。

『今回の試験の内容は、天使の羽を百枚集めること。』

「百枚か……。大変そうだけど……。やらなきゃいけないよね。」

静かな決意に燃える少女に、少年は諭すように言った。

「って言ってもさ、とりあえず仲間集めないとどうしようもないし。」

「そうだね。」

「さ、試験はもう始まってるんだ。」

少年は、隣の少女を見てニヤリ、と面白そうに笑った。

「お前より早く仲間見つけて、羽集めて、一人前になってやるよ！」

びしり、と指を突き出して、空から降りてきた少年は律儀に階段を

降り始めた。

「あ、待ってよう!」

一呼吸遅れて、少女も後ろに続く。

屋上では、二人の天使がいたことなど無かったかのように、雪が降り続けていた。

同じころ、違うところで、違う遣り取りがされていた。

そこは広い部屋だった。

明かりの落とされた部屋の奥に、大きな黒い椅子がおかれている。ゆったりと座り心地のよさそうな椅子の上には、見るからに裕福そうな男がいた。

机をはさんでその向かいには、これも座り心地のよさそうなソファが置かれている。

そこに鎮座していたのは、まだうら若い少女のような女だった。

が、その姿は人間ではない。

背中に大きな黒い翼を生やした悪魔と呼ばれる生き物だ。

彼女は見た目相応の、軽い口調で話しかけた。

「それで、どうするつもり?」

「どうするつもり、とは……。」

「私と契約して、天使の羽を手に入るのか、そうじゃないのか。…欲しくない?」

“天使の羽”と聞いた男は、怪しいぐらい表情を一変させた。

その喉から、唸る様な声が答える。

「欲しい……。欲しいに決まっている……。」  
あれが一枚あれば、一生遊んで暮らせる……。と男は続ける。  
「そうよねえ。天使の羽はすっごく高価。一枚で人生買えちゃうくらいだし?」

彼女は完全に状況を面白がっている顔で答えを促すが、男は慎重だった。

「お前と契約しなくても……。羽を手に入れることはできるんだらう?」

「ん」。まあ、出来ないことはないけど……。多分無理。」

「何故だ?」

男の問いに、悪魔は平然と答えた。

「人間は生きてる天使から羽を取れないし、それに人間はすっごく弱いから。」

「弱い、だと?」

「だってさあ?天使を天使と見分けることがまず出来ないでしょ?」

天使って見事なまでに人間に化けるし?と悪魔は言う。

「それに、天使の周りって護衛みたいなものいるんだもん。」

「護衛……。?聞いたことないぞ。」

「人間だよ。天使の羽一枚と契約して、自分だけの武器を持った人間。」

「人間が天使に協力するだ?!?」

「私もそんな人間がいるなんて信じられないけどね。」

どっちにしろ、普通の人間が天使を殺すのは難しいのよ、と、悪魔は結論付けた。

「だったら、生きている天使から羽を・・・」

「さっき言ったでしょ？それが出来るのは私たち悪魔だけなんだつて。」

悪魔の少女は、男の顔を覗き込むようにして尋ねた。

「どうする？それでも、自分ひとりで羽を手に入れるって言う？」

尋ねられた男は決心したように少女を見詰めた。

「分かった。俺に、手を貸してくれ。」

「そこなくっちゃ。」

少女は満足そうに微笑んだ後、すぐに残忍な笑みを浮かべた。

「もつとも・・・その体は私が貰うことになるんだけどね？」

「な・・・!？」

少女は悪魔らしく禍々しい空気を作り出しながら、男に歩み寄った。

不意に窓の外から入った光に、二人の影が、少女の灼眼が浮かび上がる。

それが合図だったかのようにその影の一つが大きく膨らみ・・・。

もう一つの影に吸い込まれていく。  
やがて光が消た暗闇には、どこか恍惚の表情を湛えた男の姿のみが  
あった。

一羽 全ての始まり（後書き）

小説初投稿です!!

駄文ですが、お付き合いいただけると光栄です!!

## 二羽 学校生活

「はじめまして、木下実久琉です。」

「はじめまして。亜白麗紅です。」

今自己紹介した二人は、まさしく昨日の天使たちだった。

ふわりと揺れる桃色と赤の髪。

加えて、真紅の瞳と深緑の眼は珍しいのか、大変目立っていた。

が、先生はそんなことを全く気にした様子もなく教室の中に呼びかけた。

「皆さん、今日からこのクラスに転校して来た生徒です。仲良くするように。」

小学生ならばここで元気良く“はい”という声上がるのだが、ここは高校。

先生に律儀に応える生徒はおらず、生徒同士でひそひそと会話が交わされていた。

その中で、全く興味のなさそうな生徒が一人。

長い青色の髪を後ろで束ねた男子生徒。

胸についた名札には中嶋と書かれている。

その男子に、近くの生徒が話しかけた。

「愁徒、お前転校生来るって知ってた？」

「知らなかったな。雪、お前は？」

「知らなかったよ。かわいいよな、実久琉チャン。」

雪、と呼ばれた少年の名札には、音吉と刻まれていた。雪こと音吉雪弥は、愁徒 中嶋愁徒の斜め後ろの席だ。

ちよつと変わったこのクラスには、四十個の机と椅子が並べられている。

が、このクラスの総数は三十ちよつと。

十個ほどの机と椅子が余っていることになる。

これは、毎日同じ席は嫌だと言い出した高校生らしくない生徒の作業だった。

尤も、机などを運び入れるのは全員手伝ったから、共犯といって間違ではない。

殆どの生徒が毎日席を変える中、二人の少年だけはずっとそこに座っていた。

席なんて興味がない愁徒が動こうとしないため、雪もそれに付き合っているのだ。

そして、愁徒の後ろ、雪の隣は、毎日ずっと空いている席だった。そこに目を向けた先生が言う。

「木下。今日はとりあえずあそこに座れ。」

「あそこ？」

「音吉の隣だ。手を上げろ、音吉。」

呼ばれた雪は、愁徒から視線を離すと、可愛らしい仕草で手を上げた。

「は〜い！ここだよ〜！」

声の調子もさっきのものとは全く違っている。  
それをみて愁徒がそっと、

「こいつの猫、一度でいいから大勢の前ではがしてやりてえ・・・。」  
と呟いていたとか、いなかったとか・・・。

そのすぐ後、改めて自己紹介が始まる。

「僕は音吉雪弥。雪でいいよ。よろしくね、実久琉ちゃん。」  
「よろしくお願ひします、雪さん。」

実久琉は綽名にさんを付けて、ぺこっと頭を下げた。  
そして、ちら、と目線を前へ走らせる。  
それに気づいた雪がつんつん、と愁徒の肩をつついた。

「愁徒は僕の友達。中嶋愁徒って言うんだよ。」

可愛らしく笑って自分を紹介する雪にげんなりした目線を送りながら、愁徒は実久琉を見詰めた。

「?よろしく、お願いします。」

その視線に内心首をかしげながらも、実久琉は再び一礼した。

「よろしく。」

愁徒はぼそつと答え、くるりと前に向き直る。

それを苦笑したように見詰めながら、雪は実久琉に質問を開始した。

「実久琉ちゃんって、どこから来たの？」

「えっと……。白い、街から。」

クリーチャー

現世の町なんて知らない実久琉は、とっさにそう言った。

チャッフル

天界は、幻想的な白い街だったから。

さすがに其処の地名を言うことはまずい思ったので、そう誤魔化す事にしたのだ。

「白い街?雪国から来たの?」

「え……と……。うん。」

「僕も雪国行った事あるんだ。雪がふわふわで、すっごく楽しかったよ。」

につこお、と笑う雪の顔に、実久琉は無意識のうちに首をかしげている。

何かが、変。

その笑顔に何か・・・寂しそうな色が・・・？

「どうしたの？実久琉ちゃん。考え事？」

が、そう尋ねる雪の顔に、寂しさなんてかけらも見えない。誰がどう見ても、可愛いというしかないような、完璧な笑顔。

あれは・・・気のせい・・・？

どうにも釈然としない思いを抱えながら、実久琉はそっと、麗紅の後姿を見詰めた。

その視線に気づいた麗紅が実久琉の方を振り返る。

麗紅は、実久琉から四つほど席をはさんだ、前のほうの席だった。

「どうしたんだよ、実久琉。」

麗紅は人に聞かれたく無い場合を考慮して、一般人には絶対分からないフランス語で話しかけた。

「ううん、なんでもないよ。」

「だったらいいけど・・・うわ！」

最後に不自然な声が入ったのは、近くの女子に服を引っ張られたからである。

「あんたね、転校生同士で大っぴらに内緒話してんじゃないわよ。」

「内緒話じゃないっての。そう怒るなよ。」

苦笑いしながら、麗紅は少女に弁明した。

初めから本気で怒っているわけではない少女も、ふふ、と笑みを零す。

背中に流した青味の強い紺色の長髪を僅かに揺らし、少女は実久琉の方を向いた。

そのすこし釣り上がった瞳は、木賊色のような深い緑色をしている。

実久琉は、自分に微笑んだ少女に、天使のような笑顔を返した。

### 三羽 ホームルームと一時間目

「おい、雪。」

「何？」

振り返って雪を見た愁徒は、突然無茶なことを言い出した。

「さっきの二人の会話、訳せ。」

「ええ？さっきのって、だって日本語じゃないよ？？」

「だから訳せって言ってるんだよ。お前なら分かるだろ？」

「僕フランス語は分からないよ。」

にこ、と笑って雪が言う。

それを愁徒は鼻で笑った。

「フランス語だって分かるなら訳せるだろ。」

「あう。」

雪はしまった、と言うように顔をしかめる。

だが、

「でもホントにたいしたこと話して無かったよ？」

と前置きして日本語に直した二人の会話を囁いた。

それを聞いていた実久琉が驚いた声を上げる。

「雪さん、フランス語分かるんですか??」

「あれぐらいなら分かるよ。二人とも発音凄くよかったしね。」

可愛らしく笑いながら雪が言う。

天使の二人にとってはクリーチアの言語は全て理解できるし使用できる。

だからこそ分からないだろうと麗紅も使ったはずなのに……。

「雪さんって、頭良いんですね。」

「言語しか出来ないけどな。」

実久流の言葉にそっけなく愁徒が返した。

雪が言い返そうと口を開くが、その前に先生の叱責が飛んだ。

「はい、もう授業が始まるぞ！静かにしろ!」

どっちらさっきの担任がそのまま一時間目をするらしい。

「木下と亜白は隣の奴に見せてもらえ!」

「だって、はい、実久琉ちゃん。」

「ありがとうございます。」

雪が開いて見せてくれた教科書は歴史のもので、戦争のページが開かれていた。

「今日は前回に引き続き世界大戦だ。」

先生がよく通る声がそう告げる。

「実久琉ちゃん、歴史分かる？」

「はい、得意なほうです。」

何せチアフルには、クリーチアを映す湖がある。

時間の概念が無いチアフルで育った天使は、そこからクリーチアを見て過ごす。

実久琉と麗紅も、幾度も繰り返された世界大戦ぐらいは実際に見て知っていた。

人間たちが戦って死んでいくのを、なんとも悲しい思いで見ているのだ。

なのに……。

今は自分たち天使が悪魔を敵に取り同じ事をしている。

駄目だと思ったはずのことを……繰り返している。

「そういうのは……悲しい……。」

「うん??」

眩きを聞きとがめた雪が首をかしげる。

「いいえ、何でもないです、ごめんなさい。」  
「??」

雪は心配そうに実久琉を見詰めていたが・・・。  
実久琉はそれ以上何も眩きはしなかった。

## 四羽 四時間目と五時間目

一時間目がそんな調子で終わった。

二時間目、三時間目も特に何も起こらず終了のチャイムが鳴る。

事件（？）が起こったのは四時間目の音楽の時間だった。

その日は何の因果か歌のテストの日。

勿論実久琉も麗紅も課題の歌を知らない。

なので大人しく楽譜を見ながら席に座っていた。

実久琉が行動を起こしたのは、最後の人が歌い終わり、まだ時間があるのを確認してからだった。

「すみません、先生。」

「どうしました？木下さん」

穏やかな声で返答した先生に、実久琉は言った。

「歌わせてください。」

「・・・はい??」

「暗譜、出来ませんが、歌わせてもらえませんか？」

ほんのちよっと首をかしげて、実久琉は尋ねた。

「そういわれても……。初めて聞いたんでしょう？この歌……」

「そうですね……。三十人分、聞きましたから。」

三十人分といっても、一人ずつ歌ったわけではない。

幾人かのグループに分かれて歌ったのだ。

でも実久琉の言い方はまるでその一つ一つを聞き分けていたようにも聞こえた。

「まあまあ先生。時間もあるんだし、歌ってもらえばいいじゃん。」

そう茶々を入れたのは雪である。

実久琉が歌うと言うのなら、なぜかは分からないが聞きたくなくなったのだ。

「そうですね……。わかりました。ではそこに立ってくださいね。」

先生はにっこり笑ってうなずくと、ピアノに向かって座った。

そして、伴奏が流れはじめ……。

教室は、響きになった。

実久琉の声は、低く、高く空気を震わせた。  
そして、大きく、小さく、全員の耳を打った。

途中で伴奏を担当していた先生が聞き惚れるあまり手を止めても、歌は続いた。

ただ歌だけが、華麗な調べとなつてどこまでも広がって……。

それが止んだとき。

教室は、割れんばかりの拍手に包まれていた。

ただ一人の生徒の歌声に、誰もが心を奪われた証だった。

その拍手を一身に受ける実久琉は頬を紅く染めて、ぱたぱたと席に戻る。

クラスの皆が実久琉のもとに集まる中、麗紅は淡く笑った。

その脳裏には、ハープを奏でながら歌う実久琉の姿が思い起こされていた。

数居る天使の中で、実久琉の歌声は一流だった。

それは麗紅の鼻唄などではなく……。

天界の王も認めた、世界一の天使の歌声。

「人間が聞いて、平静で居られるわけねえよな……。」

何を隠そう、麗紅自身だってその歌に酔った一人なのだから。

口々に実久琉を褒め称える声の中、終業の鐘が静かに鳴り響いていた。

「はい、五時間目始めるぞー！」

一時間目に歴史の授業を行ったはずの先生が、そ教卓の前に立っていた。

また社会をするのだろうか？

そう思った実久琉の心を見透かしたように雪が説明を入れた。

「五時間目は道德及び総合だよ。実久琉ちゃん、天使って知ってる？」

雪が何気なく言った一言に実久琉はピクリと反応する。

実久琉のほうを向いている雪は気づかなかっただろうが、麗紅がこつちに振り向いていた。

「知ってます……。話だけは。」

「今からやる授業は、天使のことを学んだよ。」

「天使のこと……を？」

「一体人間が天使の何を学ぶというのだろうか？」

人間が知っている天使の正体は殆ど無い。

羽が高価であるとか……。

人間に化けて生活しているらしいとか……。

その程度のことしか知らないはずだ。

「ほら、始めるぞ！」

先生の声が飛び、その話はそこで中断となった。

授業は、実久琉が思ったとおりのものだった。

人間が知っている数少ない天使の情報を、分かりやすく生徒に伝える。

ただそれだけの授業だった。

ところどころ情報が間違っているところがあつて、実久琉は訂正しなくなつたが止めた。

周りの生徒たちはこんな情報でも実に興味深げに聞いている。

つまり、生徒たちは天使のことを何も知らないのだ。

そこにむやみに天使の情報を公開すれば怪しいことこの上ない。人間に見つかれば殺されてしまう天使である。

『秘密厳守。』

そんな言葉が実久琉の脳内に浮かんだ。

「実久琉ちゃん、今日はこの授業で終わりだよ。」

「そうなんですか？」

「うん。だからさ、もし良かったらどこか遊びに行かない？」

五時間目が終わり、HRが始まる前の少しの間に、雪が実久琉を誘った。

「雪、むやみに誘うのは止める。引越しの片付けとかあるんじゃないのか？」

愁徒が常識的なことを言い、雪ははたと手を打った。

「じゃあ手伝いに行くよ！実久琉ちゃんの家どこか知りたいし。」

だが、雪の申し出に実久琉はわたわたと手を振った。

「い、いいです。片付けは終わってますから！」

実際は片づけが終わっているというより、まず無い。

天使はクリーチアでは決まった家を持たず、適当に夜を過ごすのだ。

麗紅も、自分に話を振ってもらっては困るので遠巻きにそれを見ていた。

「それより、この町のこと教えてほしいです。」

「うん、いいよ。じゃあやっぱり遊びに行こう！愁徒も来る？」

「俺は遠慮する。兄貴と約束があるんだ。」

どこか吐き捨てるような印象を与えて愁徒は言う。

「そっか、じゃあまた明日ね！」

雪はそれに気づかないようににっこり笑って手を振りかけ……。

「HRはまだ終わってないだろうが!!!」

愁徒ともども先生の大目玉を食らっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2140j/>

---

Swastika・Wing

2010年10月17日14時33分発行